1971年4月23日　第三種郵便物認可　2025年2月1日（毎月1日発行）712号　ISSN　0388-4163

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

2
2025
No.712

特集　**鬼、いっぱい**

「新しい自分」に出会って春を迎える　野村 朋

鬼とは何者か？　八木 透

連載　**心に種をまく——世界、日本で起きていること**　安田菜津紀

全国障害者問題研究会

みんなのねがい

2025年2月号
No.712

1　人として　五十嵐 大
2　【インタビュー】いまを語りあう　永井玲衣
4　はじめの一歩〜障害のある人を理解する　吉留英雄
6　人生苦あり笑いあり　秋保喜美子
7　心に種をまく　安田菜津紀
8　この子と歩む　中根登紀子
11　進め！ 推し活道　浜本宇太郎

特集　鬼、いっぱい

12　おに 鬼 オニ
16　鬼とは何者か？　八木 透
18　怖い鬼に向かい、人との信頼関係を紡ぐ　伊津佳恵
20　鬼の絵本、いっぱい　古澤直子
21　「新しい自分」に出会って春を迎える　野村 朋

24　私ときょうだい　仁村菜月子
26　発達を見る眼をゆたかに、おおらかに　寺川志奈子
30　私に人生と言えるものがあるなら　原田文孝
34　シリーズ 保育の現場から　益田有紀
36　実践にいかす障害と発達　安藤佳珠子
38　ニュースナビ　日本手話による教育を求める裁判　藤野友紀
40　実践の魅力　阿部直子
43　あそぼう、つくろう　小山紗知
44　みんなのひろば
46　【マンガ】のんびり ぽちぽち　池添鉄平・ナガノテツコ
47　BOOK ／編集後記
裏表紙　おいしいひととき　林 裕也

デザイン・イラスト
うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、橋野桃子、山内若菜

表紙のことば

暮れゆく港町の商店街をあやとり遊びしながら歩く放課後の帰り道。学校での出来事を楽しそうに話すその顔を夕陽がやさしく照らす。

僕も小学生の頃、下校の道は楽しい時間だった。友達と石蹴りやクイズや探検ごっこしながら帰ったことをとてもよく覚えている。草の匂い、土の感触、オレンジのあたたかい光の色。からだ全部で受け取った感覚は今でもちゃんと残っている。

歳を重ねるごとに幼い頃の記憶を辿ることが増えてきた気がする。センチメンタルな記憶。このさき撮っていく写真にもじんわりと映したい。

表紙=土佐和史
とさ　かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」（CITYRAT press）「北関東」「路地裏に咲いた花」（いずれもBUFFALO PRESS）がある。

はじめの一歩
障害のある人を理解する

第11回

発達の宿題とリアリティ

全障研大阪支部

吉留英雄

よしとめ　ひでお／1962年生まれ。社会福祉法人わかくさ福祉会ひむろ作業所所長。長年成人期障害福祉分野で勤務。きょうされん大阪支部副支部長、全障研大会分科会「働く」共同研究者。広島大学大学院修了、教育学修士（障害児教育実践史専攻）。社会福祉士、精神保健福祉士。『憲法にいちばん近いところ』（きょうされん大阪支部ニュース）など執筆

全盲の裕司さん。入所当初からあたかも自分の発する言葉が快となっているようでその場に無関係なことを話し続ける。頭に浮かぶ事柄が次々言葉として発せられる。行動面でももの壊しが常時であり、作業所から出てしまいます。特に、外への飛び出しでは、危険なので制止すると力ずくで飛び出そうとするエネルギーや声のすさまじさ。

もう一人は学校を卒業して入所した車いすの昭さんです。入所時の面談ではきはきと受け答えし、「それ、おもしろいですね」など高度な発語がありました。ですから他害があると聞いてはいましたが、さほどのことはないと思っていました。しかし事実はそうではなく、一瞬隙を見せると手が飛んできて常に生傷が絶えず。何とか避けても突然噛みつかれる。あっという間のとっさの怪我にとまどう職員に向かって「おもしろい？」と嫌味もなくたずねてきます。

障害の異なる二人ですが、職員と気持ちが伝わり合えないということでは共通していました。それが最も大きな課題として挙がっていました。

リアリティの欠如、動けない環境

イラスト　勝倉大和

●特別寄稿●

鬼とは何者か？

佛教大学教授
世界鬼学会会長
八木 透

大江山の酒呑童子

日本人にとって鬼は少なくとも悪の象徴である。また反人間的、反社会的、反道徳的な存在でもある。いうならば人間とは真逆な存在だといえよう。しかし鬼はそれほど単純ではない。だからこそ、鬼はとても恐ろしい反面、魅力的でもあるのだ。

日本の鬼の歴史を考える上で決して忘れてはならない鬼とは、京都の北部、大江山に伝わる酒呑童子（しゅてんどうじ）であろう。酒呑童子の物語の初出は、14世紀の南北朝時代に作られたとされる絵巻物の『大江山絵詞（えことば）』であり、後に能や歌舞伎などの題材ともされ、多くの人たちが知ることとなった。

物語の基本設定は平安時代の10世紀、一条天皇の時代に、京の都で貴族の姫たちが次々と何者かに浚（さら）われるという事件が相次いだ。陰陽師の占いによれば、それは大江山に住む酒呑童子を棟梁とする鬼たちの仕業であることがわかった。そこで天皇は、源氏の総大将である源頼光に鬼の討伐を命じる。頼光は渡辺綱や坂田公時ら剣の達人たちを従え、自らは修験者に扮して大江山へと向かう。一行は鬼たちを騙して酒呑童子が住む鬼の城へ入り込み、鬼たちと酒を酌み交わす。頃合いを見計らい、頼光は鬼が飲めば体が痺れて動けなくなるという魔法の酒を都の銘酒と偽って鬼たちに飲ます。酒呑童子が身動きできなくなると、一気にその首を切り落とした。頼光たちにだまし討ちされた童子の首は、斬られてもなお頼光の兜に噛みつきながら、「鬼に横道（おうどう）なきものを」と叫んだとされる。つまり酒呑童子は、「鬼はおまえたちのような卑怯な真似はしない」との捨て台詞を吐いて息絶えたのである。ここまでの物語のあらすじを見ても、酒呑童子は必ずしも

鬼神社の絵馬

怖い鬼に向かい、人との信頼関係を紡ぐ

全障研広島乳幼児サークル　伊津佳恵

こども療育センター通園の節分は、とっても怖い鬼がやってきます。「怖さ―安心」の対比的な感情を揺さぶることが感情のひだを豊かにつくります。そして、安心を感じる基盤は人との信頼関係が土台となり、気持ちを立ち直らせる力を育みます。そんなこどもたちの心を豊かにする大事な行事として節分をとらえています。

ゆうとくん

年中児のゆうとくんは、夏の終わりから運動会のとりくみが始まり、「見る―見られる」ことの意識が高まると集団参加に抵抗感が強まっていきました。登園しぶりも始まり、通園バスのバス停までは来れても、バスに乗れないことも続きました。登園することに支えを必要とし、大きなおもちゃのショベルカーを家から持ってくるようになり、そのことで安心してくると、やがて心の杖は小さなショベルカーへと変わっていきました。運動会では、ドキドキしながらも課題に対して身体をコントロールし、達成感を重ねていきました。大人の意図することに抵抗感が強かったのですが、職員が絵をかいて活動を伝えると、「これがいやだ」など自分の思いや苦手な理由を言語化するようになり、互いに心構えがつくれるように少しずつ変わっていきました。

小さな自分ではなく大きな自分を

年明けから節分のとりくみが始まりました。鬼面がついた箱積み木を倒したり、ぶら下げた鬼のパネルをボールで当てたり、はじめは楽しいあそびです。新聞紙を丸めてアルミで巻いたものをテープでとめて、豆づくりもします。ゆうとくんは力強く、ガチガチに固めて豆を作ります。職員が扮した鬼が出てくると思いっきり豆を投げつけます。鬼の靴下やズボンをみて、「今日は、○○先生だった」と言い、鬼は怖いけれど、あれは先生だと自分に納得させている様子です。とりくみが進んでいくと、怖くて不安な気持ちが高まってきました。秋は、支えとなるものをおもちゃにしていましたが、この頃は、伊達メガネやネクタイを着けて、ビジネスバックをもって登園するようになりました。大人の格好をすることで、小さい自分ではなく、大きな自分を見せていたのです。とりくみ中は豆を毎日作り、安全基地となるスペースをついたてで仕切り、〝絶対にここにいれば鬼は入ってこない、大丈夫！〟と、鬼との距離感がとれるようにしました。

当時、お家の水道が壊れて水浸しになり、お母さんが「もう引越さんにゃいけん」と嘆くほど大変なことがありました。登園してすぐにペンを持ち、この大事件を絵にしながら話したことがきっかけで、そこから絵を描くようになりました。相当、強烈で伝えたいことだったの

「新しい自分」に出会って春を迎える

保育園での節分実践を通して考える

大阪健康福祉短期大学 野村 朋

学生たちだけでなく筆者自身もそこまで深く行事の意味や背景まで思い及んでおらず、保育者の子どもに寄せるねがいの深さに感じ入るとともに行事を通して子どもたちの成長を促し文化を伝える、保育ってステキなお仕事だなあと改めて感動したことを覚えています。

「鬼」ってなあに？

「悪いことをしたら鬼が来るよ」と大人から脅かされた経験がある人は少なくないと思います。昨今は鬼から電話が来るという「鬼アプリ」などを「子どもが言うことを聞く」「しつけに便利」と保護者が使用しているという話もよく聞きます。鬼の登場する絵本はたくさんあり、さらにアニメ『鬼滅の刃』の影響もあって、保育園の子どもたちの中にも「鬼が怖い」「鬼をやっつけてやる」というイメージは浸透しています。「鬼が怖いから保育園にいきたくない」という子どもたちが増え、行事そのものを見直したり、取りやめたりする

「鬼をやっつけるだけじゃない」―節分に込められたねがい

保育士養成校の授業科目の一つに模擬保育にとりくむ授業があります。ずいぶん前のことですが、学生たちが「鬼をやっつけよう」というゲームを考えてきたことがありました。

学生たちは小道具なども力を入れて作り、準備してきたのですが、指導にあたってくださった現場経験の豊かな先生方は何とも微妙な表情。「ルールや展開も工夫されていてスムーズだし、頑張ったな」と思っていた筆者は先生方の反応に疑問を感じて尋ねてみました。長年保育園での保育に携わってこられた先生方は、学生の工夫や努力を十分認めた上で次のようにおっしゃいました。「保育園では節分は単に怖い鬼が来て追い払う、という行事にはしてこなかったんだよ」「自分の中にもある悪いものをやっつけて成長する儀式として時間をかけてとりくんだよ」そして具体的にご自身の経験をお話ししてくださいました。

発達を見る眼をゆたかに、おおらかに

第11回 ユニークなこころの世界を尊重する支援

鳥取大学
寺川志奈子

てらかわ　しなこ／鳥取大学地域学部。研究テーマは「子どもの自我、自己、および社会性の発達と教育的支援」について。共著に『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価1　子どもの「ねがい」と授業づくり』(クリエイツかもがわ）など

激しい行動の背景にある思いは？

舞さんは特別支援学校に通う重い知的障害を伴う自閉症の女の子です。小学部低学年の頃までは、何かをほしい時には、大人の手を引っ張って取らせようとするクレーンで要求を表していました。高学年になると、ビデオから覚えた言葉や「○○ください」などの一、二語文で要求を出すようになります。一方で、見通しの弱さや気持ちの切り替えのむずかしさから、不安や怒りといった感情が抑えきれずにパニックになることが度々ありました。高学年になっても、初めての活動やスケジュールの変更があった時、また、自分の思いとはちがっている時や失敗した時など、相手や物に当たるような行動が頻繁にみられていたそうです。

J先生は舞さんが中学部1年生の時に担任になりました。激しい行動の背景に、舞さんはどんな思いやねがいをもっているのだろう。自分の思いを話しことばで表現することがむずかしい舞さんのこころを理解することは容易ではありませんでした。そんな時、J先生は舞さんの描く絵に注目します。J先生は舞さんの絵を見た時、これまでつかみどころのなかった舞さんの内面世界がそこに表れているように感じられたそうです。

ファンタジーの世界を楽しむ

舞さんは小学部1年生の頃から、描けるようになったマルをいっぱいひろげて、テレビのキャラクター「ガチャピン」

私に人生と言えるものがあるなら

原田文孝

はらだ　ふみたか／1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかかわり続ける。NPO法人ささゆり会代表

第11回　人生、どう生きるべきか

出会い

私と京都府立与謝の海養護学校（当時）の教員たちとの出会いの話から始めます。高校生の時に岡山市内で高校生の部落問題の集会がありました。私は友人と参加したのですが、その宿舎に与謝の海養護学校の高等部の生徒が泊まっていました。一緒に風呂に入ったり、交流会をしたりしました。与謝の海養護学校は、１９６９年の４月に仮校舎で高等部教育から始まったのですが、私が高校生の頃ですから開校して３～４年目ごろのことだと思います。夜の交流会で与謝の海養護学校の教員たちが、歌ったり、踊ったりする姿に驚いたことを覚えています。私が通っていた高校の教員の姿とあまりにちがうのです。

私は、京都の大学に行き、学校の教員を目指しました。そこで再び与謝の海養護学校（青木嗣夫編著『僕、学校へ行くんやで』１９７２）と出会い、「あの先生たちは、なぜ、あんなに自由で、生き生きしていたのか？」を考えたのでした。

民主的な地域づくり

与謝の海養護学校設立の基本的理念の

精神障害のある子ども・若者の理解と支援⑤
家族グループでの親の回復

日本福祉大学
安藤佳珠子
あんどう　かずこ／専門は社会福祉学。ひきこもりやその家族の活動を支援。精神科病院等でソーシャルワーカーとして勤め、現在は日本福祉大学の社会福祉学部社会福祉学科講師。論文「不登校経験があるひきこもりの若者の葛藤する機会を保障するソーシャルワーク：発達集団が生み出す関係性のなかでの自立」等。

精神障害のある子ども・若者をもつ親の支援において、親自身の回復のプロセスを支えることは重要です。今回は、家族グループでの親の回復について、事例を通して考えてみましょう。

変化への恐れ

山根貴子さん（60代）との出会いは、地域の相談支援事業所の支援者が、保健所で開催された家族会で講話をしたことがきっかけでした。家族会終了後、山根さんから「ベテランのメンバーだけでグループをつくりたいので協力してほしい」との依頼があり、支援者は快諾しました。翌月開催されたベテランの家族グループで、支援者はファシリテーターとして参加しました。メンバー同士が意見を交わせるよう心がけました。その後、山根さんから相談の希望があり、現在の家族会について話し合うことになりました。山根さんは「今の家族会では現状報告だけで終わってしまい、家族が本当に困っていることや苦しい思いを出しきれていない」と語り、もっと話しやすい運営方法にしてほしいと話されました。支援者は山根さんと一緒に、どうすれば保健所の職員に家族の思いを伝えられるか考えました。その結果「3～4人の小グループに分かれて実施する」という具体的な提案が生まれました。これをまずベテランの家族グループで話し合い、了解が得られたら保健所に伝えることになりました。

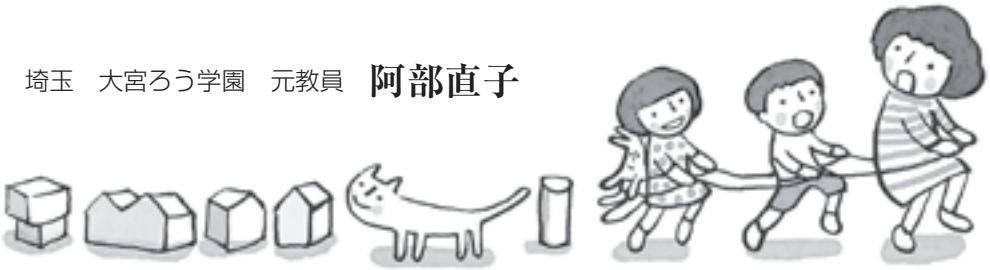
しかし、次のベテランの家族グループの際、山根さんは保健所への提案について何も語りませんでした。支援者が参加者にたいして、「3～4人の小グループに分かれて実施するという話を聞いたのですが、どうなりましたか？」と尋ねました。するとメンバーからは「保健所の職員にはお世話になっているので、新しい提案をすることで物申しているようにとらえられたら困る」という声が出てきました。さらに「変わるのって怖いんですよ」という発言もありました。その後、続々とその意見に同意する発言が出てきて、参加した全員のメンバーが何かを変えることや、変わることへの怖さを共有しました。これは家族会の運営についてだけではなく、子どもとのかかわりや、自分が変わらなければならないことについても、やはり怖いという意見でした。

提案すること自体に意味が

支援者はメンバーにたいして「変わる

古典を学ぶ楽しさを求めて

埼玉　大宮ろう学園　元教員　**阿部直子**



はじめに

ろう学校中学部での寄席のとりくみを紹介します。

中学校国語の学習内容には古典（古文・漢文）があります。文語の決まりを覚えたり、訓読のしかたを覚えたりすることからスタートします。ろう学校の生徒にとってはなかなか大変なことです。これらの苦行の先に何か楽しいことが待っていないと乗り切れません。私は「困難な時には文化の力を借りよう」と思って実践してきました。この場合の文化とは古典芸能のことです。落語・歌舞伎・狂言に着目して、寄席という形でゴールを設定しました。教科書の巻末には落語・歌舞伎・狂言の舞台が写真入りで紹介されています。テレビでもあまり見ることのない寄席に実際に足を運んだ生徒はほとんどいませんでした。しかしネット社会の今となっては、好きな時に好きなだけ見たい演目を動画で見ることができます。いつか本物の舞台を見に行ってほしいと願いつつ、今はネットの力も借りることにしました。

国語の授業はグループ別学習を行っていて、1グループ3〜4人で学習しています。1年は落語「桃太郎」、2年は歌舞伎「外郎売（ういろう）」、3年は狂言「柿山伏」にチャレンジしました。1・2年合同グループ（重複学級）は落語「まんじゅうこわい」を劇遊びを経て落語に挑戦しました。1月には新春リレー寄席と銘打って、先生方や他グループの友だちに見てもらいました。グループごとにリレー形式で演目をつないでいく寄席です。ゴザを敷き、座布団に座って演じ、黒・橙・緑の定式幕（じょうしきまく）を張って雰囲気を出しました。観客が20人を超えたら大入袋を配り、寄席文字で書いためくりを作って気分を盛り上げました。ここでは、3年間のとりくみを学年ごとの視点から演目ごとにまとめて紹介します。

落語「桃太郎」1年生

誰もが知っている桃太郎の昔話をして息子を寝かせようとした父親が、逆に息子から桃太郎の話に込められた深い意味を解説されてしまい、とうとう父親の方が寝てしまう…という愉快な話です。生徒もこの話の落ちが気に入りました。「無邪気なもんだねぇ…」と言って父親の寝顔を見下ろす息子の得意げな表情が会場の笑いを誘いました。教科書には長い落

みんなのねがい 2025. 2 No.712
二〇二五年二月日発行（毎月一日発行） 一九七一年四月二三日 第三種郵便物認可 東京都新宿区山吹町四―七 新宿山吹町ビル五階 全障研出版部
定価715円（本体650円・税65円）

おいしいひととき

仲間と「ぽぽスク定食」を

大阪　林 裕也

ぽぽろスクエアは、障がいのある青年が通う学びの場・福祉型専攻科です。ぽぽろスクエアの学生（利用者のことを学生と呼んでいる）に人気のとりくみの一つがクッキングです。

今回1年生が作ることになったのは、おにぎり・卵焼き・みそ汁セット、その名も「ぽぽスク定食」。おにぎりは自分の好きな具材を選び、大きさも形もバラバラ。卵焼きは、家の味付けを紹介する。「○○くんのお家の卵焼きの味おいしかった」「みそ汁の味ちょうどいい！　ありがとう」という声が自然と聞こえてくる。〝仲間といっしょにつくる〟〝同じ食事を囲んで食べる〟そんな経験が温かく淡い青春の一ページとなるのかも。

雑誌 08441-02
4910084410250
00650